

ル・ステージ)、集光鏡(コンデンサー)、虹彩絞り等を附するを得ば便利なり。

是より上は技術者の腕次第なり、苟くも寫眞術を必得たる人ならば、少しく工夫してその操作を習得する事容易なるべし。茲に掲ぐるは右の如き装置にて撮影せるものにて、「アウリクラリア」は約二十七倍、「ケラチウム」は約百五十倍の廓大なり。(大島 廣)

●話の種(四)

○紐育の水族館で、大仕掛にイルカ *Pursiops truncatus* の飼養を試みた事、いつかの本誌に出て居つたが、十一箇月経つてもまだ生きて居る。

○北米東海岸産食用蟹 *Callinectes sapidus* の雌が一度に産む卵の数は三百萬である。

○開戦前獨逸には、牛二千萬、羊五百萬、山羊三百萬、豚二千六百萬、馬五百萬頭あつた。それで其等から、食用として、少くも年々、牛八百萬、羊及山羊五百萬、豚二千六百萬頭を得る事が出来、飼養人も捕虜で補充が出来る。だから少くも獸肉に就ては、獨逸は食糧攻に遭ふ事はない。

○實驗によると、動物の吐き出す炭酸瓦斯の多寡は氣壓湿度・氣温に關係する。即ち其等が高まれば瓦斯量は減じ、降下すれば反對に瓦斯量は増す。而して別種の試験によつても、炭酸量は、普通の空氣中に於るよりも硫酸で濕

氣を吸収させた空氣中に於て、谷中に於てよりも山上に於て、又暖かな空氣中に於るよりも冷い空氣中に於て増す、前後の實驗は正に一致して居る。(W. THOMSON 1914.)

○天然浴用海綿の代用品として現に護謄製があるが、近頃 Viskose といふ纖維素から造り出す事が始められて其値段も廉い。Viskose は Cellulose の Xanthogen acid ester である。

○波斯小羊の皮といふと、亞米利加あたりでは大變珍重されて、現に紐育丈でも、毎年二十萬乃至二十五萬も輸入され、一枚一〇弗乃至一五弗もするものなうだが、實は波斯産のものでなくて、Pokhara 産の Karakul 或は Arabi sheep の小羊の皮である。それが無暗に輸出された結果、本場の Karakul 純血種は五千頭位になつて仕舞つたので、近頃法律で、其輸出を禁ずる事にした。

○傳書鳩が今度の戦争にも使はれて居る事前にも述べて置いたが、流石に獨逸軍は、Prussels を占領するとすぐ、全市の傳書鳩を、市場の大きな建物の中に拘禁して仕舞つた。

それから傳書鳩が敵地を撮影して歸つて来る事も前に出して置いたが、其爲に獨逸軍は態々運搬用兼飼養場所に充てる檻車を造つて戦地に用いて居る。寫眞器は、鏡玉が二つ附いて居つて、同時に前後を寫す様になつて居るのもあれば、鏡玉が一つで、活動寫眞的に、一定の時間を隔てて、一つのフィルムに八つの寫眞を撮る様にな

つて居るものもある。寫眞の大きさは一時半平方で、器械の重さは何れにしても約二オンス半を超えない。そして活動寫眞の方は、將來二十四乃至三十枚も同時に寫せる様改良の見込がある。鳩は之を革と護謨紐とで胸に結いつけて貰ふのだが、元來飛び上つて方向を定める時、旋回飛翔をするものなので、同じ場所を色々の方向から寫す便利がある。高度は一五〇乃至三〇〇呎だが、飛行機から放してやつてもよく、鳥の鐵砲丸に當る憂は殆んどない。寫せば彼等は毎時平均四〇哩の速力で歸つて來る。

○近頃 *Guernsey* ^{ガーンジー} 種七才の牝牛で、三百六十五日間に牛乳一九六三・五封、含有脂肪量一〇五九・五九封を出して、世界的記録を作つたのがある。——と或外邦の雜誌に出て居つたが、して見ると、毎日の出乳量五三・八封、含有脂肪量五・四%な譯である。然るに試に百科辭典を搜して見ると、短角種には毎日出乳量六〇・〇封とか七〇・二封などいふのがあり、脂肪量も *Jersey* ^{ジャージー} 種には六・七%などいふのがある。して見れば此世界的記録といふのは點數の事をいふのか。それは乳が多く出ても、脂肪量が少くてはいけないとか、出る期間が短くてはいかんとか、色々な條件で點數をつける。その事を指すのかも知れない。それにしても牛乳一〇・三封が一ガロンに相當して居るのであるから、一ガロンを二升五合として計算すれば、該牛一日の出乳量は大約一斗三升に當つて居る。こんなのは日本の普通の乳屋の牛には殆んど其例がない。脂肪

量の如きも、日本では、内務省令で、三%以上たるべしとしてあるのだが、地方へ行くと屢それ以下のさへある。それで五・四%といふのは濃厚さがわかる次第だ。

○色盲は遺傳によつてのみ起る。而もそれは必ず母系がらのみ遺傳し、父系からは絶対にしない。色盲血統の女は、よし自身が色盲でなくも、其子孫の約半分に色盲を遺傳する。(W. BAYSON, 1914.)

○基督教に於ても *ADAM* ^{アダム} と *EVE* ^{イブ} とが神の命に背いて、蛇の誘惑に遭ひ、林檎を盗んで食つたと申すが、林檎を食つたといふのは實は男女の働をいつた事で、其罪惡に依て人間が生れ、益々罪惡に依つて人間が榮えて居る。(算法學博士。大正三年十二月。)

○プレパラート中の或箇所に印を附けるに、その印が大きな部分を包括してもよいものなら甚簡單であるが、其印が極めて小さい範圍を制限したものでなければならぬ時には *Water immersion objective* を用いるとよい。それがなければ *oil-immersion objective* でも、又極めて度の高い普通の *objective* でもよい。その鏡玉の先に、一寸カーミンで染めた水滴をつけ、顯微鏡の筒を下して、それでプレパラート上の所要の場所に印をつけ、急に筒を離し、扱て其印をつけた周圍に、何か水に溶けないもので圓を書いて置くのである。(J. BOYTON, 1914.)

○*Papua* ^{パプア} の蠻人が人を喰ふのは、單に儀式とか祭典とかの爲ばかりでない。實際に食物として且嗜好品として

食ふのである。又蛇喰人種の大多数は同時に又人喰人種である。(W. N. BEAVER 1914)

○昨年の九月八日 CHARLES DARWIN の長男 WILLIAM ERASMUS DARWIN が七十四歳で歿した。父 DARWIN の『表情論』(一八七二年)の最初の研究材料となつたのは即ち赤坊の時の此人である。

○歐洲の放浪人種 Gipsy は印度東南部から起つたものである。それが西北に移動し、Peshawar の近傍から西部に移つて、十五世紀に西歐に這入つたのである。

○米國の現存野牛 (Bison) は一九一三年末の調査によると三千七百八十八頭で、其内五百四十九頭は其年内に生れたのである。

○本年は卯の年なるに因んで、隨筆類から兎の話を引き出すと次の通り。

○古事記に見えて居る大國主神と稻羽の素戔の話は有名なものであるから特に書きあげない。併し此話の中には色々と面白い事實が含まれてある。第一此兎は自ら淤岐の島から渡つたのだと稱して居る。第二其渡海的手段に和邇と稱する動物を使つて居る。第三外傷を治療するに蒲黃を用ゐて居る。第一は動物分布の上から、第二はワニと稱するものと本體が何かといふ問題から、第三は日本最初の外科治療の記録である點から面白い。但し其等の動物が何かの象徴に用いられたのなら話は又別になる。

○併し兎に角右の場合、兎に遭つたのが瑞兆になつて、大國主神は稻羽之八上比賣と約婚する事が出来た。後世になつて、同じく白兎が徳川家勃興の吉兆をなして居る。

○それはこんな話である。徳川時代には、嘉例として、將軍は正月元旦に兎の吸物を召上る事になつて居つた。

是は家康九代の祖先有親が、鎌倉管領足利持氏敗軍自害の後、殘黨の追窮がひどかつたので、同じく其家臣であつた彼も、剃髮して姿をかへ、追のびて信州林郷に至り、林藤助光政にかくまつてもらつた。其時光政雪中を厭はず兎を狩り、永享十二年正月元旦之を饗應した。それから徳川の運が開けて來たので、其後林家が上州の方に移つてからも、正月に徳川家に兎を贈るのが慣例になつた。その初めに兎を捕つた所は松本の近傍で、兎田と稱し、舊幕時代諸役御免の地になつて居つた。又兎の献上は、五代將軍綱吉が殺生を忌んだので、その時林家からも鯛を献上する事に改め、兎の吸物は御止めになつて仕舞つた。併し其後復興したかどうかは知らない。

○ウサギは『得幸』だ。ウサギは幸運を開かしむる獸といふ義だと書いて居る本もある。

○支那にもそんな話がある。後魏の朱榮が葛榮を討つた時、二匹の兎が馬前にあらはれた。それが吉兆をなして朱榮は勿ち敵を殲した。それで朱榮は雙兎の碑といふのを建てた。

○元來支那では兎は餘程神聖な獸と考へられて居つた。

(質疑應答) ○問答一

らしい。だから一般に、雌兎は雄兎の毫を舐つて孕み、子は口から生むとものだと信じて居た。

○或は又兎には雄がない。故に月を望んで孕み、口から子を生むとも考へて居つた。此口から子を生むといふ動物は、支那には外にも鵲ヒヨドリ、蟾蜍ヒキガエルなどがある。

○右の兎は月を望んで孕むといふのは、兎は明月の精だと信ぜられて居つたのから起つた傳説である。支那人は月中に兎の形ありと見た。それで月は陰精の宗なり、積みて獸の象を成すなどといつて月と兎とを結びつけた。

○兎は吐なりなどいつて、吐といふ字から兎字が誘導されて來た様にいつてるものもあるが、それも兎は口から子を生むといふ説に關聯したものである。

○そんな風で、支那では十二の時を護る名獸の一つにもされて居つた。そして仙術に精しく、玉の杵と臼とで靈藥を舂くとも信ぜられて居つた。それで支那の仙人が月世界に通ふには、兎から傳はつた仙術を用いたものである。

○佛經でも兎は、龍や虎など一所に、靈獸の一つにされて居つた。そして月世界に棲んで居る傳説は印度にもあつた。即ち天帝が兎の心底を試して見やうと思つて、其肉を索めて食はうとした所が、兎は自ら身を火中に捨てた。それで天帝之を感んで、其焦げた兎を月の中に置いて、未來一切の衆生に諭し示す所があつた。此等似よつ

た話は、支那と印度と、どちらが先に起つたかは自分は知らない。

○兎が波の上を渡るといふのも佛典から起つて居る。即ち兎渡則浮、馬渡及半浮、象徹底截流などといつて、佛經では、兎・馬・象の泳ぎ方を比較して譬諭に用いたものなさうだ。この波の上を走るのも矢張り仙術だらうと眞面目に書いて居る本もある。

○かち／＼山の昔噺は日本人で知らない人もなからう。あれは支那の諸書から材料を蒐集し、組み合せて作つたものと、馬琴などは盛に例の博學を振りまわして居るが、併し其實、日本固有の稻羽イナバの素兎シロウサギの話を作りかへたといふのが本當らしいさうである。

○最後に前號の話の種(三)の誤植を訂正をして置きたい。それは三五頁上段後より四行目『善庵隨筆』とあるは『善庵隨筆』で、三六頁下段初めより六行目『死志』は『藏志』の間違である。
(N、S、生)

質疑應答

●問一

Spirochaete は孢子蟲とするものと「バクテリア」とするものとあるが如し。各其理由如何。

(K、Y、生)

答 「スパイロキータ」を「バクテリア」となすは形態學